

SSSV報告

Short Visitに行こう

歯学科4年 小澤月詩

私は夏休みの間、後輩2名と約2週間の台湾留学生交流支援制度プログラム（SVプログラム）に参加させていただきました。SVのプログラムは、様々な国の中から希望を出し、先生方に選考していただけます。この制度では、日本学生支援機構からの支援を受けることができるなど、参加しやすいよう工夫がされています。

私が今回台湾のSVを希望させていただいたのは、その国柄と日本との交流の多さにあります。

日本と台湾は、観光や文化のみでなく、医療の分野でも交流が深く、お互いに進歩のための良い影響を与える存在であると私は考えています。また、同じアジア圏であり、島国でもあります。似た環境を持つ中、それぞれにどのような医療の背景があり、また歯科の制度はどのようなになっているのか、非常に興味がありました。

今回のプログラム内容は現地市民病院歯科診療部での見学、アシストなどの研修、大学付属病院での頭頸部外科手術見学、CAD/CAMスキャニング実習でした。後輩はまだ臨床科目の履修が始まっておらず、見学しながら私自身も後輩に手技や意義について説明をしながらお互いに多く学びのある実習内容でした。台湾では日本とあまり変わらない医療の提供がされていますが、“予防”という概念がなく、常に“施される医療”であると現地の雰囲気やお話を伺って感じました。衛生面も日本ほど強く意識されておらず、患者側も気にしていないようでした。医療の進歩という言葉がよく使われていますが、実際は医療者と国民の

意識の変化が正しい言葉の使い方ではないかと考えさせられるお話も伺うことができました。さらに、台湾には歯科衛生士という日本では当たり前前の職業が確立されていません。代わりに看護師や雑務を行う助手が現場で働いています。国立陽明大学は台湾で唯一歯科衛生士の重要性に着目した学部長が歯科衛生科を設けた珍しい大学でもあり、卒業生であり、研究生の先生から非常に歯科衛生に対しての貴重なお話や考え方を伺うことができました。

休日や平日の実習終わりには九份や陽明山、夜市など観光スポットや地元の人オススメの場所へ現地の学生が連れて行ってくださいました。

英語が公用語の国ではないため、なかなか現地の人がいないとコミュニケーションが取れなかったり、交通機関を利用しにくいところに連れて行ってくださり、とても楽しく、また感謝しています。

私も初めは言葉の違う国に行くことに抵抗がありましたが、帰ってきた後は、現地での歯科学を学んだだけでなく、自分のコミュニケーション力と英語力の向上、新しいことにチャレンジする大切さを学ぶことができたと思います。また、明確な目的を持つことができた4年生の時期だからこそ、より今後の自分にとって有意義な時間を過ごせたこと、自分の意見を英語でも話すことができたことに、自分のことではありますが歯学部生としての成長も感じます。

最後ではありますが、このような貴重な経験を快く応援してくれた両親、常に私達生徒の視野を広げる機会をくださる新潟大学の先生方、台湾への道のを引率して下さった泉教授、台湾で大

変お世話になりました羅文良先生、法慈に深く感謝いたします。また、新潟大学と他諸国の大学との連携が永く続きますように、また多くの新潟大

学の学生が良い経験、良い刺激を受けられるように願っております。



ミャンマー研修に参加して

歯学科5年 小野 すみれ

「あなたは本当にミャンマー人と同じ顔をしていますね」ミャンマーで何度言われたであろうか。

これまでの24年間、日本人離れしているねと言われ続けてきたが、とうとうミャンマーの地で現地の方々によって認められることとなったのだ。

12/17～26の期間SSSVのプログラムで、ミャンマーのヤンゴン歯科大学へ行って来ました。この医療支援は、2014年以降、毎年口腔外科の先生方と歯科麻酔科の先生方が行っているもので、今回初めてそこに学生も同行させて頂く形での参加でした。1日目～4日目の午前中が術前検査から手術見学、午後は各診療科の見学、5日目はヤンゴン歯科大学の若き精鋭たちとのディスカッションという内容盛りだくさんの刺激的なプログラムでした。

1日目の術前診査では2日目以降に手術を行う患者さんの診断を行う様子を見学しました。先生方が限られた環境で、かつ短時間に次々と診断を行っていく姿に、大変感銘を受けました。印象的だったのは、日本では見る事ができない、唇顎口蓋裂の治療を受けていない10代後半の患者さんの症例を見学できた事でした。日本では、唇顎口

蓋裂に対して乳幼児期から一貫治療を行うのが一般的ですが、ミャンマーでは成人になっても口蓋閉鎖術を行っていない患者さんがいる事を知り、珍しい症例の経験に加え、医療の格差も改めて感じる事ができました。二日目からは先生方が行う手術を多くのヤンゴン歯科大学の研修医や先生方の熱心な視線とともに見学するという稀有な体験もできました。また、病棟で手術を終えた患者さんの家族が笑顔で話して下さった事も印象深く心に刻まれています。患者さんご家族の人生を治す事ができる、先生方の手技の素晴らしさに加え、改めて、やりがいのある仕事だと感じました。

最終日の学生さんとのディスカッションでは、日本の歯科教育についてたくさんの質問を受けました。学生さん達の学習に対する真剣な姿勢と熱意に驚くと共に、私自身も負けない様にもっと頑張ろうと心に誓いました。

最後に、不慣れな私たちに、このような機会を与え、又お世話頂いた口腔外科、歯科麻酔科の先生方、石田先生、また親切に面倒を見てくださった現地の学生さん達、先生方のご厚意に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

また機会があれば、次回は歯科医師としてミャンマーの歯科医療に協力できたらと思っております。



カナダ・ブリティッシュコロンビア大学

歯学科6年 那須優介

日本学生支援機構による海外留学支援制度(SSSV)により、2018年2月より2週間、カナダのブリティッシュコロンビア大学(UBC)に同期の荒木、工藤と共に短期留学をさせていただきました。この場をお借りして、今回の短期留学について簡単にご報告させていただきます。

UBCでのプログラムの内容はシンプルで、現地の学生のスケジュールを手渡され、自分たちで自由に見学しなさい、というものでした。留学生向けの講義や院内ツアー等はなく、自らその場にいる先生や学生に話しかけて学ぶという積極性が試されました。そうした中で2週間、講義・少人数セミナーへの参加、臨床実習の見学・アシストなどを行いました。

UBC歯学部歯学科は1学年約50人の4年制です。臨床実習は、簡単なものは1年次から始まり、3、4年次で本格的な診療を行います。本学の臨床実習で学生1人が担当する患者さんは15人前後ですが、UBCでは1人当たり50人にもものぼるそうです。学生の患者さんが多い理由として、UBC歯学部の外来にある全ユニットが学生と大学院生専用であることと、治療費を安くしていることが背景にあるようです。学生が臨床実習中に経験する症例数は、クラウン、義歯、根治、抜歯等々どれも桁違いで、そういった経験値の高さに裏付けられた手際の良さや滲み出る自信のようなものに少し圧倒されました。

また、開業歯科医院の見学もさせていただきました。院長はUBC卒のカナダ国籍ですが生まれ

は日本という経歴で、カナダ滞在中の日本人の患者さんも多く来院していました。院長曰く、日本人の、特に若い患者さんの口の中を見ると残念に思うことがよくあるそうで、日本での歯科治療について一部疑問視していました。日本の開業歯科医のモラルや、人々の予防意識には課題があるのかもしれないと感じました。

UBCはカナダのバンクーバーにあります。バンクーバーの気温は東京と同じくらいで気候は穏やか、都市部から近いところに自然も豊かで、非常に住みよいところでした。現地の学生も非常に親切で、何度か夕食に誘ってくれたほか、週末にはスキー場に連れて行ってくれました。流石は冬季オリンピック開催地で、雪質は新潟のものとは全く違い、サラサラで大変滑りやすかったです。

今回の留学を通して、カナダという国やUBCの学生の優れた点を発見し刺激をもらった一方で、自分が普段いる環境がいかに恵まれているか、何が自分の強みになるのかを考えるきっかけとなりました。臨床実習で言えば、症例数はUBCと比較して少ないですが、ライター先生の充実したサポートに加え、同じフロアで診療する先生方をお手本にすることができ、総合病院の中で機能する歯科としての役割を学べる環境など、勝っている点は少なくありません。このように一度外へ出てみることで、日本という国にいる自分を見直し、改めて気付くことがたくさんあると思います。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった魚島教授、石田先生をはじめとする先生方、引率して下さった柿原先生、そしてこのプログラムに携わる全ての方々に深く感謝申し上げます。



引率の柿原先生、同期の2人と



現地の学生達と夕食



ミャンマー医療支援活動に参加して

歯科麻酔学分野 岸本直隆

2018年12月17日～23日の日程でUniversity of Dental Medicine, Yangon, Myanmar（ヤンゴン歯科大学）における“口唇裂・口蓋裂を中心とする口腔外科手術に関する医療支援”に参加しました。新潟大学・歯学部と同校との姉妹校提携に基づき、2014年から開始されたこの事業は今回で5回目となりました。メンバーは前田健康・歯学部長、高木律男・顎顔面口腔外科学分野 教授、瀬尾憲司・歯科麻酔学分野 教授、児玉泰光・顎顔面口腔外科学分野 講師、永井孝宏・顎顔面口腔外科学分野 医員、岸本（歯科麻酔学分野 准教授）の6名に加え、SSSV事業として歯学科5年の相澤有香さん、小野すみれさんの2名が参加しました。

ヤンゴンに到着した翌日から病院にて約30名の患者に対する術前診察を実施し、術者と相談の上、今回手術を行う症例を決定しました。日本での術前診察とは違い、採血や呼吸機能などの詳しいデータが乏しく、全身状態の把握に苦慮する場面もありましたが、視診、聴診を中心とした五感による評価を行い、慎重に診察を進めました。手術は12月19日～21日にかけて計9症例を行いました。患者年齢は7カ月から19歳で、手術内容は口唇形成術、口蓋形成術、骨移植術、顎関節授動術、副耳切除術、鼻修正術でした。顎関節強直症の症例では開口量が15mm程度と重度の挿管困難でしたが、医科病院から気管支ファイバースコープを借用し、無事に挿管することができました。渡航前は設備や器材面における不安がありましたが、麻酔器は日本で一般的に使用されているものが揃

えられており、事前に準備してきた器材と合わせて問題なく手術・麻酔を終えることができました。手術中は多くのヤンゴン歯科大学スタッフが見学に来て、熱心に手術の手技を学ばれていました。また関連病院の麻酔科医も積極的に日本で使われている薬剤や器具について質問されており、この支援の目的が手術や物資の支援だけでなく、教育や情報の共有といった意味を含んでいることを実感しました。

ヤンゴン歯科大学のスタッフには病院外でも大変お世話になり、ホテルから空港や病院への送迎をはじめとして、歓迎会や慰労会の開催や市内観光案内など色々と配慮していただきました。また最終日の手術が終わった際には多くのお土産やプレゼントを頂き、おもてなしの心に深く感動しました。私は初めての参加でしたが、他の先生は複数回この事業へ参加されており、ヤンゴン歯科大学の歯学部長や口腔外科の先生方とも懇意で、長年に渡って良い関係性を保ってこられたことを感じました。これまでボランティア活動へ参加する機会はほとんどありませんでしたが、ヤンゴン滞在中に多くの感謝の言葉を頂き、それによって自分の心も豊かになった気がしました。本事業は本学、および参加者にとっても意義が大きく、今後もこのような素晴らしい活動が継続されることを期待しております。

最後になりましたが、参加された先生方、学生さん、渡航のため色々と準備をして頂いた歯学部事務の皆様、病院手術部または材料室、支援の意義を理解し麻酔薬を提供して下さった丸石製薬株式会社様に深くお礼申し上げます。



写真1 成田空港にて出発前の集合写真



写真2 手術終了後の記念写真、ヤンゴン歯科大学のスタッフと共に